

滋賀のめざす特別支援教育のあり方懇話会第3回会議 次第

日時：平成26年(2014年)11月10日(月)
午前10時から12時まで
場所：県庁新館7階大会議室

開 会

- 1 懇話会検討内容の取りまとめ案について
 - ・委員意見の整理について
 - ・懇話会意見のまとめ方について

- 2 その他
 - ・次回の予定

閉 会

- | | |
|-------|-----------------------------------|
| ・委員名簿 | |
| ・座席表 | |
| ・資料1 | 「滋賀のめざす特別支援教育のあり方懇話会」における委員意見の整理表 |
| ・資料2 | 「滋賀のめざす特別支援教育のあり方懇話会意見」のまとめ方(案) |

「滋賀のめざす特別支援教育のあり方懇話会」における委員意見の整理表

検討項目	委員の主な意見	意見のまとめ	今後に向けての考え方
<p>1. インクルーシブ教育システムの構築</p>	<p>【理念的なこと】</p> <p>1. 障害のある子どもと通常学級で共に過ごす中で、周りの子どもたちが「助けよう」「支えよう」という思いを多く持ってくれたことに感動した。支援が必要な人たちを、みんなが分かってくれるような世の中を作っていかなければ。</p> <p>2. 最近の保護者は、子どもはいずれ地域に帰っていくので仲間と一緒に生活する基盤をつくりたい、そのために、<u>地域の小学校（特別支援学級）で生きる力、ソーシャルスキルや友達といかに生活していくかを学んでほしい</u>という思いがある。</p> <p>3. 滋賀県は全体的に貫くものが糸賀思想のように、<u>障害のある方が、本当に生き生きと自己実現していくところが希望になっていく、という理念を持ってこの問題に取り組む必要がある。</u></p> <p>【考え方】</p> <p>4. 地域、社会がいかに障害のある人に対して<u>意識を変えていけるか</u>というようなことに、県がどれだけ本気で取り組むのかということを含めての項目であろうかと思う。滋賀がめざす特別支援教育はこういう目標を持ってのことであり、これをどこかに謳う項があってほしいと思う。</p> <p>5. 障害者に対して何かをしてあげるという観点ではなく、<u>地域の中で地域を輝かしてくれる、それが滋賀の教育をよりよいものにしていく1つの側面</u>というような観点を。</p> <p>6. 教育だけではなく、<u>福祉にも就労にも医療にも関わる</u>ことが議論されてきた。<u>大きい視点でまとめる部分も。</u></p> <p>7. どういった支援が必要か、一緒になって考えていくことをシステムなり仕組みなりの中で<u>福祉と教育が連携</u>しながら形にしていきたい。</p> <p>8. その<u>地域にある特別支援学校がセンター的機能を発揮</u>して支援していく、それを、県がどう支援していくかというシステム、このシステムをどう作っていくかということが非常に大事。</p> <p>9. 小学校、中学校単位という小さな地域の中に高等部、高校も巻き込んでもう少し広い意味での地域性という発想も。</p> <p>【具体的手立てに関わること】</p> <p>10. 地域の小・中学校、高等学校、通常の学級、特別支援学級、通級による指導、どこを選択していくか、一つの学校だけではなく対応が難しいから、その地域にある<u>小・中学校が連携</u>して、それを市町村教育委員会が支援しながら、そのネットワーク、スクールクラスターとして作っていく。</p> <p>11. <u>免許取得率</u>のこともあったが、教員の課題がある。普通の小中学校に勤務する先生方の認識レベルの問題、対応する能力の問題がインクルーシブ教育を考えるにあたって非常に大きな問題。</p> <p>12. 特別支援学級で、<u>支援員の配置</u>やクールダウンできる個別の部屋などインクルーシブ教育に必要なハード・ソフトの検討を。</p> <p>13. 現役を引退された方などとの関わりや協力といったことが滋賀のめざす教育にもう少し関われないか。</p> <p>14. <u>教員の資質を高める</u>という研修を毎年開催し、各学校から小・中学校の教員が行っている。ハード・ソフト面で不十分な点はあるが、特別支援学級担任もまた、通常学級担任も、研修を積んで力伸ばそうという取り組みはされている。</p> <p>15. 「<u>質と量の充実</u>」、お金を伴う人の配置の問題でもあるので、量の方が難しいが明示していただければ。</p> <p>16. 現状として職員が研修を積むだけではどうしようもない部分もあり、財政のことがあるが、標準定数法を超えて県の措置でやっていくという方法があるのではないか。</p>	<p>1. 障害のある子どもとない子どもが<u>ともに学ぶ</u>ことの意義を知ってもらうことが大切</p> <p>2. 障害のある子どもが<u>地域の小・中学校で学ぶ</u>ことが大切</p> <p>3. 地域、社会が障害のある人に対して<u>意識を変えていく、障害のある子どもが地域を輝かし、自己実現していく</u>、という観点を持って取り組んでほしい</p> <p>4. <u>福祉・労働・教育が連携し、一緒になって考えていく</u>ことが大切</p> <p>5. インクルーシブ教育の実現に向けた、<u>地域の小・中学校、特別支援学校が連携</u>していくシステムが大切</p> <p>6. 教員の<u>特別支援教育の専門性</u>の向上が必要</p> <p>7. インクルーシブ教育のための<u>ソフト・ハードの検討、質と量の充実</u>が望まれる。<u>外部人材等の活用</u>も考えられる</p>	<p>1. 障害のある子どもを<u>周りが十分に理解</u>し、障害のある子どもとない子どもが十分な教育が受けられるよう、<u>共に学び合</u>い、認め合うことができる環境を作ることが必要</p> <p>2. インクルーシブ教育システムの推進に向けては、医療・保健・福祉・労働等と連携した取り組みが重要</p> <p>3. 小・中学校、特別支援学校が連携して、<u>地域の特別支援教育を推進していくシステム</u>をつくることが重要</p> <p>4. 小・中学校、高等学校と特別支援学校との<u>教員の一層の交流</u>が必要</p> <p>5. 小・中学校教員の<u>特別支援教育に関する理解や専門性</u>を高めるための研修の充実が必要</p> <p>6. 障害のある子どもが小・中学校で学ぶことができるための<u>様々な人的配置</u>などの検討が必要</p> <p>7. 障害のある子どもが小・中学校で学ぶための<u>基礎的環境整備</u>や合理的配慮の研究をさらに進めていくことが必要</p>

検討項目	委員の主な意見	意見のまとめ	今後に向けての考え方
<p>2. 適切な教育のための就学相談・支援</p>	<p>【理念的なこと】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 就労を考えた学校選択。中学校での3年間を選ばずに、特別支援学校中学部から高等部までの6年間というスパンで力をつけさせたいと考えておられる保護者も多い。 2. 特別支援学級、特別支援学校それぞれのメリットがあるが、本来はどこに就学しても、その子にとって一番いいものが身につけられるべきだが、そうでない現実もある。 3. この話は就学前教育の方にもここへきてもらう必要があるのでは。就職率 17%という実態もやっぱり知ってもらわないといけない。大半の子どもたちが施設でお世話になっているということも、いろんな人に知ってほしい。 4. 本人、保護者が安心して教育の場を選択できる仕組みの構築、教員の養成が必要である。 5. 最近の保護者は、子どもはいずれ地域に帰っていくので仲間と一緒に生活する基盤をつくりたい、そのために、地域の小学校（特別支援学級）で生きる力、ソーシャルスキルや友達といかに生活していくかを学んでほしいという思いがある。（再掲） <p>【考え方】</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 就学指導に関して、県としてある<u>一定の基準</u>を示す、あるいは県内での<u>統一的な基準</u>をということは、重要だと思っているが、現状では、特別支援学校に行った方が必要な力を身につけられると認識されている方が多い。 7. 特別支援学級、通級、特別支援学校、高等養護学校、分教室とか、それぞれ特徴を出しながら、<u>1方向に特別支援学校に集まる</u>のではなく、課題を特別支援学校で解決すればまた地域に戻る、という仕組みが必要。 8. 単に学級を増やす、学校を増やすというだけでは難しいので、行政的にも<u>県と市町村とそれぞれの役割分担</u>や特徴、あるいは連携といったことも検討課題。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. <u>どのような学習の場であつても、個々の子どもに必要な教育が行われることが大切</u> 2. 就学指導に関する<u>統一的な指標</u>を示すことは重要だが、地域の小・中学校を選べない現状もある 3. <u>本人、保護者が安心して教育の場を選択できる仕組みの構築と教員の養成が必要</u> 4. 特別支援学校から地域の学校へ戻る<u>仕組みが必要</u> 5. 単に学校や学級を増やすだけでなく、<u>県・市町の役割分担、連携の仕組み等</u>の検討が必要 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 通常学級、特別支援学級、特別支援学校など、<u>どの学習の場であつても障害のある子ども一人ひとりに応じた教育を提供することが必要</u> 2. どの地域においても障害の状況に応じた、<u>適切な就学相談・支援が受けられるための指標</u>づくりなどが必要 3. 障害のある子どもの学ぶ場について、<u>県・市町の役割分担、連携の仕組み等</u>の検討が必要

検討項目	委員の主な意見	意見のまとめ	今後に向けての考え方
<p>3. 進路実現に向けた、教育の充実と新しい学校づくり</p>	<p>【就職率の向上】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>就職率</u>は、地域の受皿の整備状況、在籍生徒の障害の状況によって変わってくるが、これだけの差が出てくることの課題は大きい。 2. 高校の生徒にとっても、卒業した後の就職率、定着率が課題。生徒が社会に出て仕事に就くために、何を身につけておかなければならないか、<u>教育現場の役目</u>。 3. 特別支援学校への入学希望者は非常に多く、逆に県立高校の方が定員割れしている状況。生徒にとっては支援が行き届いている中で、社会に出た時にギャップが大きく、社会で悩まれることになっているのではないかと思うので、卒業までの3年間の中で、インターンシップとか現場での実習など、社会の厳しさを少しずつ学ばせていけるようなシステムが高等学校の方にも特別支援学校の方にも必要。 4. 子どもの<u>個別の指導計画、個別の教育支援計画</u>がキーワードになってくる。 5. 適応力やソーシャルスキルの力をいかに身につけていくかということ、個別の指導計画、個別の教育支援計画にあげて、積み上げていくことが、就労に繋がっていく。 6. なぜ就職希望が低いのか。本来ならそこに教育の関わる部分があると思うが、そこを上げる教育の有り様を、明らかにしていかななくてはならないと思う。 7. 滋賀県においても就労対策については労働雇用行政の中で進めており、障害者の法定雇用率は、全国平均を上回っている状況。企業もかなり努力されていると感じているが、そのような中でこうした差が出るということは、まだまだ企業向けの啓発が不足しているということだが、そのこと以外にも何か要因があるのではないかと思っている。 8. 学校の中での就職に向けての方法論、方針、アプローチの仕方に、違いがあるのではないか。 9. 職業教育、<u>就職率の高い他県と滋賀とどう違うのか</u>、そういったものが見えてくると、その違いが原因の一つであるのか、教育の中身も含めて、環境の要因と子ども自身の障害の要因と分けて考えていく必要性はあるのでは。 10. 一人ひとりの生徒に向き合っていないといけない、養護学校に工業系でも専門的な部分を教えていくのであれば、そういった支援を入れていかないと。 11. <u>職業学科、専門学科</u>の有無を含めて、<u>抜本的な教育課程</u>を組むとか、<u>基盤整備の方向性</u>をどうもっていくかということが大事なのではないか。 12. 子ども一人ひとりの状態像やニーズに応じたきめ細かなプログラム、柔軟な職業教育プログラムの提供などの整備が必要。 13. <u>青年会議所などと連携</u>を取りながら実習先を確保したり、子どもの勤務意欲を育てるのは、学校の中で解決できるような問題ではないので、そういった多面的な取り組みをどう進めていくのか。 <p>【発達障害児への対応と高校教育】</p> <ol style="list-style-type: none"> 14. 高校においても自閉症の生徒を把握する必要があるが、現状はなかなか厳しい状況である。<u>教員の質を高める必要がある</u>。 15. 特別支援学校のセンター的な機能として、分教室が併設されている高校では、高校の授業を一緒に見てもらうような取り組みをすることでアセスメントをしたり、教員の研修、対応力を高められる絶好のセッティングになっている。 16. <u>高等学校に地域性を促進</u>するような取り組み、「高等学校における発達障害等の生徒指導の充実」は中身だけの問題でなく、高等学校にも高等部というのをもっと作っていくような、<u>システムとしての場の保障</u>。 17. 高校生がボランティアに関わることで、高校生の自分探し、自己有用感や自分の進路を考えることにつながる。 18. 高等学校での発達障害のある生徒への特別支援教育体制をシステム化していくことが重要。 19. 自閉・情緒学級の子どもが高校に進学し、人間関係が上手くいかないということも、<u>ソーシャルスキルの指導</u>が必要。 20. 自閉・情緒学級の子どもたちは、学力面では力を発揮するが、人間関係が取りにくく、県立の学校はその理解が本当にできているのか。 21. 高校生にもソーシャルスキルを身につけるようなことを考えていくことが、自分の力で生きていく就労に直接結びついていく内容ではないか。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. <u>就職率が低迷</u>している現状と、就職を希望する生徒が少ない現状についての課題は大きい 2. 高等学校、特別支援学校高等部ともに<u>卒業後の自立と社会参加に向けた教育</u>が必要 3. <u>個別の指導計画、個別の教育支援計画</u>をもとにした積み上げが就労に繋がっていく 4. 就職率の向上に向けた<u>先進的な取組</u>の研究が必要 5. <u>職業学科の設置や専門的な教育課程の検討</u>が必要 6. 障害の状態に応じた<u>きめ細かで柔軟な職業教育プログラム</u>の作成が必要 7. <u>青年会議所等との連携</u>のもとで実習先の確保に向けた取組が必要 8. <u>分教室が併設された環境</u>を生かした高等学校での特別支援教育の充実が必要 9. 高等学校での<u>発達障害のある生徒への教育</u>の充実が必要 10. <u>高校生もソーシャルスキル</u>を身につけることが、就労に結びついていく 	<ol style="list-style-type: none"> 1. <u>先進的な取組事例</u>を参考にしながら、高等養護学校、特別支援学校高等部への<u>職業学科の設置</u>による職業教育内容の充実等、卒業後の進路を見据えた教育課程の充実が必要 2. 実習先、就職先確保のために<u>青年会議所や企業団体等への働きかけ</u>を進める 3. <u>高等学校に対するセンター的機能</u>を一層強化する 4. <u>高等養護学校、高等部分教室</u>をさらに充実させ、併設高校を中心にセンター的機能による高校への支援を強化する 5. 高等学校における<u>発達障害生徒等の指導</u>を充実させるため、教育課程や指導体制等の検討が必要

検討項目	委員の主な意見	意見のまとめ	今後に向けての考え方
<p>4. 望ましい通学支援</p>	<p>【自立に向けて】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 毎日自分の力で登下校するというのが、障害のある子どもたちの大きな力になっていく。毎日積み重ねていくことで、子どもたちの可能性を大きく広げていける。 2. 障害の重い子の通学をどう考えるかということと、障害の軽い子の自主通学をどうしていくか、自立と社会参加を実現する上で、学校としての大きな役割でもある。 <p>【課題】</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 今の状況はスクールバスが多い。またたくさんの時間を要して通学をしている。今後の大きな課題。 4. 医療的ケアを必要とする子どもの通学支援、家族の負担感、県で開催されている会議で改めて考察を。 5. 特別支援学校の子どもの障害の種類など、本当に様々。医療行為が必要な子どもの送迎についての実証研究、学校でも関わる事があれば協力していきたい。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自分の力で通学することで、子どもの可能性が大きく広がる 2. スクールバスの通学時間が長く課題である 3. 障害の重い子どもと軽い子どもの通学をそれぞれどうしていくか考える必要がある 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自分の力で通学することで、子どもの可能性が大きく広がることを踏まえると、子どもの将来の自立に向けて、公共交通機関等を使った通学を促進させるための取組が必要 2. スクールバスの通学時間が長く課題であり、そのためにも障害の重い子どもと軽い子どもそれぞれの通学を考えていく
<p>5. 在籍増への対応</p>	<p>【増加要因について】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 増加要因として、特に知的障害などは理解が進んだので、見出しやすくなったというのが大きい。 2. 滋賀県の障害児教育は、糸賀氏の思いもありすごく丁寧に見てきており、障害児教育への親の気持ちも育ってきている。 3. 子どもの教育の場、特に障害のある子どもには、ある程度ゆったりとした環境でないといけない。学校によって差ができ過ぎないようにお願いしたい。 4. 在籍増の原因は何かということを明らかにしていく。 <p>【対策・考え方について】</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. 障害種別にとらわれない教育課程等の検討も含め、あるいは部門制で、知肢併置とかあるいは知病肢との併置とか、様々な子どもたちの障害の専門性を確保できた上で通学区域の検討を考えていくなど、抜本的なところの方向性を示さない。 6. 特別支援学校高等部の子どもが増えてきているということを、もう一度細分化させて、地域でもう少し教育が継続できるような体制になっていかないと、今の増加の状況は解決できない。 7. 児童生徒増加への対応策が平成24年度に県から出されている。これは着実に進めて頂きたい。その対応策の評価をしながら、予想在籍者数の推移を取っていただきたい。 8. 在籍者増の一因には、滋賀県の人口増加、都市化ということもみていかなくてはならない。いろいろな課題が出てくるが、国の施策、県の施策が親の思いと合致したい方向に考えていかないといけない。 9. 特別支援学校の教育内容であるとか教育理念に関わるような、こんな学校をという中・長期的な計画を是非出していきたい。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 在籍者増加の要因としては、知的障害や障害児教育への理解が進んできたことがある 2. 知肢以外の障害種併置の検討や通学区域の見直しなど抜本的な検討が必要 3. 「対応策」の実行と新たな今後の推計が必要ではないか 4. 特別支援教育の教育理念に基づいた学校づくりが必要であり、中・長期計画を立案してほしい 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 特別支援学校は、様々な障害種に対応できる体制づくりや、学校間の連携を一層進める他、複数障害種に対応する特別支援学校の設置や通学区域の検討が必要 2. 今後の在籍数の新たな推計を行うことや推計に応じたさらなる対策の検討が必要 3. 特別支援教育の教育理念に基づいた学校づくり、中・長期計画の立案が必要

「滋賀のめざす特別支援教育のあり方懇話会意見」のまとめ方（案）

はじめに

■本県特別支援教育の現状

○本県の特別支援学校、特別支援学級の在籍者数の増加率は、全国と比べて大きい。

○県内の発達障害等で特別な支援を要する児童生徒の割合は全国傾向と比べて高い。

○特別支援学校、特別支援学級への就学状況が市町によって大きく異なっている。

○H24年度末の県立特別支援学校高等部卒業生の就職率は全国平均と比べ10ポイント低い状況であったが、H25年度卒業生については、若干改善したものの、全国平均よりは低い状況である。

■あり方懇話会設置の目的

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築への動きが加速する中、滋賀の特別支援教育について、現状を踏まえた新しい展開とさらなる推進を図ることが急務となっており、障害のある子どもたちの自立と社会参加をめざした、これからの滋賀の特別支援教育のあり方について抜本的な検討を行う。

検討の観点

- 1 インクルーシブ教育システムの構築をめざした取り組みの促進
- 2 適切な教育のための就学相談・支援の推進
- 3 進路実現に向けた、教育の充実と新しい学校づくり
- 4 望ましい通学支援のあり方の検討
- 5 在籍増への対応

観点ごとの意見のまとめ

1 インクルーシブ教育システムの構築

【委員の主な意見】

【意見のまとめ】

1. 障害のある子どもとない子どもがともに学ぶことの意義を知ってもらうことが大切
2. 障害のある子どもが地域の小・中学校で学ぶことが大切
3. 地域、社会が障害のある人に対して意識を変えていく、障害のある子どもが地域を輝かし、自己実現していく、という観点を持って取り組んでほしい
4. 福祉・労働・教育が連携し、一緒になって考えていくことが大切
5. インクルーシブ教育の実現に向けた、地域の小・中学校、特別支援学校が連携していくシステムが大切
6. 教員の特別支援教育の専門性の向上が必要
7. インクルーシブ教育のためのソフト・ハードの検討、質と量の充実が望まれる。外部人材等の活用も考えられる

【今後に向けての考え方】

1. 障害のある子どもを周りが十分に理解し、障害のある子どもとない子どもが十分な教育が受けられるよう、共に学び合い、認め合うことができる環境を作ることが必要
2. インクルーシブ教育システムの推進に向けては、医療・保健・福祉・労働等と連携した取り組みが重要
3. 小・中学校、特別支援学校が連携して、地域の特別支援教育を推進していくシステムをつくることが重要
4. 小・中・高校と特別支援学校との教員の一層の交流が必要
5. 小・中学校教員の特別支援教育に関する理解や専門性を高めるための研修の充実が必要
6. 障害のある子どもが小・中学校で学ぶことができるための様々な人的配置などの検討が必要
7. 障害のある子どもが小・中学校で学ぶための基礎的環境整備や合理的配慮の研究をさらに進めていくことが必要

3 進路実現に向けた、教育の充実と新しい学校づくり

【委員の主な意見】

【意見のまとめ】

1. 就職率が低迷している現状と、就職を希望する生徒が少ない現状についての課題は大きい
2. 高等学校、特別支援学校高等部ともに卒業後の自立と社会参加に向けた教育が必要
3. 個別の指導計画、個別の教育支援計画をもとにした積み上げが就労に繋がっていく
4. 就職率の向上に向けた先進的な取組の研究が必要
5. 職業学科の設置や専門的な教育課程の検討が必要
6. 障害の状態に応じたきめ細かで柔軟な職業教育プログラムの作成が必要
7. 青年会議所等との連携のもとで実習先の確保に向けた取組が必要
8. 分教室が併設された環境を生かした高等学校での特別支援教育の充実が必要
9. 高等学校での発達障害のある生徒への教育の充実が必要
10. 高校生もソーシャルスキルを身につけることが、就労に結びついていく

【今後に向けての考え方】

1. 先進的な取組事例を参考にしながら、高等養護学校、特別支援学校高等部への職業学科の設置による職業教育内容の充実等、卒業後の進路を見据えた教育課程の充実が必要
2. 実習先、就職先確保のために青年会議所や企業団体等への働きかけを進める
3. 高等学校に対するセンター的機能を一層強化する
4. 高等養護学校、高等部分教室をさらに充実させ、併設高校を中心にセンター的機能による高校への支援を強化する
5. 高等学校における発達障害生徒等の指導を充実させるため、教育課程や指導体制等の検討が必要

2 適切な教育のための就学相談・支援

【委員の主な意見】

【意見のまとめ】

1. どのような学習の場であっても、個々の子どもに必要な教育が行われることが大切
2. 就学指導に関する統一的な指標を示すことは重要だが、地域の小・中学校を選べない現状もある
3. 本人、保護者が安心して教育の場を選択できる仕組みの構築と教員の養成が必要
4. 特別支援学校から地域の学校へ戻る仕組みが必要
5. 単に学校や学級を増やすだけでなく、県・市町の役割分担、連携の仕組み等の検討が必要

【今後に向けての考え方】

1. 通常学級、特別支援学級、特別支援学校など、どの学習の場であっても障害のある子ども一人ひとりに応じた教育を提供することが必要
2. どの地域においても障害の状況に応じた、適切な就学相談・支援が受けられるための指標づくりなどが必要
3. 障害のある子どもの学ぶ場について、県・市町の役割分担、連携の仕組み等の検討が必要

4 望ましい通学支援

【委員の主な意見】

【意見のまとめ】

1. 自分の力で通学することで、子どもの可能性が大きく広がる
2. スクールバスの通学時間が長く課題である
3. 障害の重い子どもと軽い子どもの通学をそれぞれどうしていくか考える必要がある

【今後に向けての考え方】

1. 自分の力で通学することで、子どもの可能性が大きく広がると、子どもの将来の自立に向けて、公共交通機関等を使った通学を促進させるための取組が必要
2. スクールバスの通学時間が長く課題であり、そのためにも障害の重い子どもと軽い子どもそれぞれの通学を考えていく

5 在籍増への対応

【委員の主な意見】

【意見のまとめ】

1. 在籍者増加の要因としては、知的障害や障害児教育への理解が進んできたことがある
2. 知肢以外の障害種併置の検討や通学区域の見直しなど抜本的な検討が必要
3. 「対応策」の実行と新たな今後の推計が必要ではないか
4. 特別支援教育の教育理念に基づいた学校づくりが必要であり、中・長期計画を立案してほしい

【今後に向けての考え方】

1. 特別支援学校は、様々な障害種に対応できる体制づくりや、学校間の連携を一層進める他、複数障害種に対応する特別支援学校の設置や通学区域の検討が必要
2. 今後の在籍数の新たな推計を行うことや推計に応じたさらなる対策の検討が必要
3. 特別支援教育の教育理念に基づいた学校づくり、中・長期計画の立案が必要

滋賀の特別支援教育がめざすもの

基本的な考え方

○障害のある子どもが十分な教育を受けられるよう教育の充実を図るとともに、可能な限り障害のある子どもと障害のない子どもがともに学ぶ（障害の重い子どもも含めて可能な限り地域の学校で学ぶことのできる仕組みづくり）

○一人ひとりの子どもたちが、自らの障害に応じて職業的・社会的に自立する（日常生活や集団生活に必要な力を身に付ける、障害や適性に応じた進路選択の実現）